

# ロシア語動詞の統辞論的研究

栗原成郎

## 序言

ロシア語において文の機能中枢を司るものは、言うまでもなく、動詞である。小論は文の中核を成す述語としての機能をもつ動詞の本質に注目しつつ、ロシア語動詞の文法カテゴリーの特性と統辞機能の領域を明らかにすることを目的とする。表題に「統辞論的」研究と謳ったのはそのためである。ロシア語動詞は、一般に、人称、時制、アスペクト、態、法などの文法カテゴリーをもつものとされているが、その理論的処理法には実にさまざまな固有の難点があり、研究者のあいだに意見の一致は見出しがたく、未解決の問題も多い。

1960年頃から1980年までの約20年間にロシア語文法理論の研究は長足の進歩を遂げた。ソ連においては、この間に、科学アカデミーロシア語研究所の編集に成る三種類の「アカデミア版ロシア語文法」がそれぞれ、1960年、1970年、1980年に10年の間隔を置いて出版され、理論面の開発と記述の方法において着実な進展を見せている。

「1960年版アカデミア文法」の通称で一般に知られている『ロシア語文法』（二巻三分冊）〔文献5〕は実際には再版で、初版は1952-1954年に刊行された。この『ロシア語文法』はマール主義言語理論をめぐる批判論争を超越した直後のソ連言語学界の歴史的状況と編集主幹 В.В.Виноградов の柔軟な研究姿勢を反映して、良い意味での「19世紀的な」正統的記述文法への復帰であり、19世紀から20世紀前半にかけての文学作品からの豊富な用例を駆使して文法的事象を網羅的に記述し、膨大な資料を体系化した規範文法として、種々の理論的弱点を指摘されながらも、依然としてその正典的権威を保持している。

Н. Ю. Шведова の監修に成る『現代ロシア標準語文法』（1970）〔文献6〕は現代の文法理論の課題に答えることを急務として編集され、新しい文法理論の構築と20世紀中葉のロシア標準語の共時的体系の科学的記述を志向した。「70年版アカデミア文法」は言語的事象の体系化と記述のモデル化を探究したが、文法的事実の網羅と知悉は最初から意図していなかった。『現代ロシア標準語文法』は専門家のための理論の書であり、《reference grammar》あるいは《справочник》として編まれたものではなかった。

最初の「アカデミア文法」が出版されてから四半世紀が過ぎ、その間、文法理論の発達は目ざましいものであり、一方においては、ロシア語の規範そのものにも変化が生じ、ロシア語研究所においてロシア語の事実に関する新しい情報や資料が蓄積された。この状況のなかから創出された「1980年版アカデミア文法」〔文献18〕は先行の二つの「文法」の成果を踏まえ、理論的諸問題の解決と複雑な言語事実の体系化を指向し、規範の面からの評価を加えつつロシア語の構造を科学的に記述した最新の「規範的記述文法」である。

このソ連アカデミア版『ロシア語文法』（1980）に一步先んじて1979年にチェコスロヴァキア科学アカデミー外国語研究所の編纂に成る『ロシア語文法』（二巻）〔文献17〕が刊行された。この書は、ロシア語を研究するさいにつねにチェコ語との対照を考慮におくチェコスロヴァキアのロシア語研究の伝統の上に立って一般スラヴ文法の普遍的原理の確立を内に秘めつつ、ロシア語の構造を記述したもので、記述の統一性・一貫性と理論の整合性を特徴とする。

このように、1960年～1980年の20年間はこれらの四種類の「アカデミア文法」を輪廓としてロシア語文法の研究にとって一時期を画している。

この時期に属する体系的な記述文法としては、上記の諸文典のほかに、**A. B. Исаченко** の『スロヴァキア語との対照におけるロシア語の構造』二巻（1960）〔文献7〕と東独で公刊された『現代のロシア語』四巻（1974－1978）〔文献31〕が重要な業績である。記述文法のほかにも、ロシア語動詞に関する研究は1960年以後活発化し、注目すべきモノグラフが数多く公刊されている。

このような学問的状況の中にあっても最初に取り組むべき課題は、プラハ版を含めた四種の「アカデミア文法」を核とする基本文献の丹念な比較の作業に基づく文法理論の検討と批判的解説の試みである。

ロシア語動詞の形態論的カテゴリーのうち最も深くかつ複雑に統辞論に関わっているのは態 (**залог**) のカテゴリーである。従って、「ロシア語動詞の統辞論的研究」への序論として態の文法カテゴリーの性格と問題の所在を明らかにすることから作業を始めるのが適当であると思われる。

# I 態 ( ЗАЛОГ ) のカテゴリー — 序論にかえて —

## 1 他動性 (переходность) のカテゴリー

他動性 (переходность), 態 (залог), 再帰性 (возвратность) のカテゴリーは密接に絡み合っている。他動性のカテゴリーは語彙的・統辞的カテゴリーであり、形態的なカテゴリーである態から分離される。他動性を標示する形態論レベルの手段はない。他動性とは動詞が直接補語を支配する能力を言う。直接補語 (прямое дополнение) とは前置詞をとまわらない名詞類の対格形である。しかし前置詞のつかない対格形のすべてが直接補語であるとはかぎらず、また対格形以外の格形態 (すなわち「否定生格」や「部分生格」) が直接補語となる場合もある。

ロシア語には (広くは、スラヴ語には) 直接補語の異形態として時間・空間の意味を表す状況語の機能をもつ対格形が共存する。いわゆる「運動の動詞」(глаголы движения) は自動詞とみなされるが、対格形の「時間・空間の量」を表す状況語をとまなうことがある。例: **идти всю ночь** “夜どおし歩く”, **ехать сотню верст** “百露里行く”。これらの場合には、格形態の副詞化が行われていて、動詞と対格との統辞関係は支配 (управление) ではなくて付加 (примыкание) である、と説明される。

対格の直接補語の役割は、原則として、任意の名詞が果し得るが、対格の状況語となる名詞は意味的に条件づけられている。対格の状況語は「時間的持続」ないし「空間的量」を表すから、対格形の意味の差異 (直接補語か状況語か) が不十分なために従属関係にある動詞の他動性/非他動性が決しがたくなるような場合はほとんどないであろう。しかしながら、「運動」ないし「状態」を表す自動詞にある種の接頭辞がつくと、他動詞化され、結合する対格との統辞関係が付加から支配へと移行する。例: **проехать улицу** “街を通る”, **перейти дорогу** “道を横切る”, **пробежать все расстояние** “全距離を走りとおす”。

他動詞であることを表す形態論レベルの標示手段はないが、造語法のレベルでは他動詞性ないし自動詞を標示するいくつかの手段がある。

自動詞に接頭辞がつくと、対格支配の他動詞になることがある。例: **выслужить орден** “永年勤務して勲章をもらう”, **заездить лошадей** “馬を乗りつぶす”, **заработать кусок хлеба** “一片のパンをかせぐ”, **избегать весь город** “町じゅう走りまわる” **обойти яму строной** “穴を避けて通る” [6/§ 640; 18/§ 882 I. 2]。

接頭辞法による自動詞の他動詞化についてはある程度の生産力が認められるが、接尾辞法による他動性の標示手段は知られていない。わずかに、色彩を表わす形容詞語幹から形成される動詞のうち、接尾辞 **-е-(ть)** が自動詞をつくるのに対して、接尾辞 **-и-(ть)** が他動詞をつくる場合が指摘し得るにすぎない。例: **белеть** “白くなる” / **белить** “白くする”, **чернеть** “黒くなる” / **чернить** “黒くする”。

接尾辞のうち、**-нича-(ть)**, **-ствова-(ть)**, **-ну<sub>1</sub>-(ть)**, **-е-(ть)** は自動詞を形成する。[6/§ 849]。

« постфикс » の **-ся** はそれが付いた動詞がつねに自動詞であることを標示する。しかし、後述するように **-ся** を態の語形変化を示す文法的形態素と観るか、それとも単なる造語的形態素と観るかは、態の処理の仕方に応じて異ってくる。

『ロシア語文法』(1960)は前置詞をとまわらない対格を直接補語にとる動詞のみを他動詞とよ

んだ〔5/§ 670〕。『現代ロシア標準語文法』（1970）は他動詞を「前置詞をとみなわない対格および生格を強支配する動詞」と定義した〔6/§ 848〕。『ロシア文法』（1980）も同様に、対格と同等に生格を直接補語として支配する動詞を他動詞としている〔18/§ 1456-1458〕

対格形の代りに生格形が直接補語として現れるということは、動詞の他動性と自動性の境界がある程度ゆるがすことになる。

まず否定生格の場合、**Я не читал эту книгу / Я не читал этой книги** “私はその本は読んだことがない”のように、否定の他動詞の直接補語の位置に対格のヴァリエントとして生格が立つが、この用法は厳格な規則性をもたず、恣意的でさえある。それに、このような生格は否定の自動詞とも結びつき（**не сидел и часу** “一時間と座っていなかった”）また無人称表現にも可能である（**не слушалось музыки** “音楽は聞えてこなかった”）。このような用法の無原則のために、否定生格を直接補語の表現と見なさない学者もいる（例えば、**Янко-Триницкая**〔25/66-68〕）が、『ロシア文法』（1980）は否定他動詞構文における直接補語の対格から生格への交替を規則的なものと見なしている（**читая книгу — не читал книги**）〔18/§ 1456〕。否定の他動詞と結合する生格は統辞的配合による直接補語の偶有的ヴァリエントと見てよいであろう〔11/13; 18/§ 1369〕。

次に、他動詞とともに用いられる部分生格に関して言えば、きわめて狭い語彙的限界性（物質名詞的の性格）と意味的特性（量的・時間的部分性）をもつが、他動詞の直接補語と認められている。**Янко-Триницкая** は、直接補語の対格と部分生格とが文の同種の成分に固有な並立的語結合として用いられること（例：**купи ручку и перьев** “ペン軸とペン先を買ってこい”、**принеси гвоздей и молоток** “釘とかなづちを持ってこい”）、対格の目的語を生格の対象に置き替えても動詞の語彙的意味にいかなる変化も生じない（例えば、**выпить воду** “その水を飲み干す”と**выпить воды** “水を一口、二口飲む”という語結合において**выпить** “飲む”という動詞の語彙的な意味は絶対に同一である）ことを指摘した。彼女の定義に従えば、「他動詞とは目的語の対格を支配する動詞であり、支配される名詞の意味に応じて対象の部分の意味をもつ生格が対格目的語の役割を果し得るもの」である〔25/67-68〕。部分生格は語彙的条件による直接補語の偶有的ヴァリエントである。

『ロシア文法』（1980）は否定生格、部分生格のほかに**ждать письмо / письма** “手紙を待つ”、**хотеть пряник / пряника** “ハニー・ケーキを欲しがる”、**просить милостыню / милостыни** “施しを乞う”のような対格のヴァリエントとしての生格の直接補語を認めている〔18/§ 1458〕。これは現代ロシア標準語における規範の変化を反映したものである。

動詞の他動性と自動性の境界は絶対的なものではなく、現代ロシア語のある種の動詞には他動性と自動性の二つの意味が共存している。例えば、**читать** は対格を支配する場合には他動詞であって '**воспринимать написанное**' の意味をもち（**читать книгу, письмо**）、補語をとらずに自動詞として用いられる場合は '**уметь воспринимать написанное**'（**Мальш уже читает** “その子はもう字が読める”）の意味になり、あるいは '**заниматься чтением**'（**Мальш сидит и читает** “子供は座って本を読んでいる”）の意味になる。このような他動詞（不完了体）の自動詞的用法は伝統的に「絶対的用法」**« абсолютное употребление »** とよばれている〔5/§ 53; 6/§ 850; 18/§ 1459〕。

以上に概観したように、他動詞と自動詞とを区別する形態的（造語的）標示はほとんどない

えに、動詞の他動性／自動性は具体的には統辞関係によって規定されながら動詞の語彙的意味に関わっている。この他動性という語彙的・統辞的カテゴリー (лексико-синтаксическая категория) はすべてのロシア語動詞を包括する。「他動性の力」 << сила переходности >> の度合は動詞によってさまざまに異なる。それは最大限(вставлять, пилить, держать)から最小限(идти, плыть, спать)までの幅をもつ [4 / 76]。<< косвеннопереходность >> (斜格補語との結合性) も << непереходность >> (自動性) も << переходность >> の段階の一つである。

Б. Ю. Норман はすべてのスラヴ語動詞を直接補語との結びつき方によって(直接補語を支配する能力に応じて) 三つのグループに分けた。

動 詞	直接補語との結合性
自 動 詞	-
他 動 詞	(+)
つねに他動詞	+

a) 自動詞。語彙的な意味において他動性の意味が原則的に欠如しているもの(例: лежать, карабкаться)。このグループの動詞は総じて直接補語と結合せず(表ではマイナスで記号される)、従って、直接補語を支配する力はゼロに等しい。

b) 他動詞(表では最後のグループ)。つねに直接補語と結合するもの(例: поднимать, оказывать, брать)。この安定した結合性は表のなかでプラス記号で示される。これらの動詞の語根形態素に盛られた他動性の意味はつねに統辞的に実現される。これらの動詞はかならず直接補語の異形態をとまって現われ、その従属関係の力は一箇の単位を成す。つまり、transitiva tantumである。

B) 他動詞。その語彙には動作が客体に向う方向性の意味があるが、それは潜在的なものにすぎず、形式的に表現されるためには一定の統辞的条件を必要とする。すなわち直接補語の異形態の一つが現在しなければならぬ(пью воду)。この条件が欠けている場合には、他動性の意味は表現されずに内顯的に保たれる(пью, пью большими глотками)。このために、この動詞グループは表のなかで括弧に入ったプラス記号で表されている [11 / 17]。

Б. Ю. Норман の動詞分類は、結局は、他動性(переходность) :: 非他動性(непереходность) の二項対立カテゴリーの中に納まるものである。

## 2 態(залог)のカテゴリー

動詞の表す動作の客体(目的語)に対する関係が「他動性」(переходность)とよばれる語彙的・統辞的カテゴリーであるのに対して、述語動詞の表す動作の文法的主語に対する関係は「態」(залог)とよばれるカテゴリーである。

態に関しては、1世紀以上の研究の歴史があるにもかかわらず、統一の見解はまだ見られない。19~20世紀間にさまざまな залог 理解が積み重ねられたが、その内容は多種多様である。ロシア語の動詞体系に態のカテゴリーを認めない立場もあれば(Н. П. Некрасов, В. И. Даль: など)、態のカテゴリーの設定の正当性を認めるにしても、その設定法は、2つの態を

立てる説から11の態を区別する説 (А. А. Шахматов) まであり、問題は多岐にわたる。

態の理論に関する最大の問題は態をいかなるカテゴリーとして処理するかの問題であり、議論の余地はまだ充分に残っている。

態は形態的カテゴリーであるのか、統辞的カテゴリーであるのか。それとも両方にまたがるカテゴリーであるのか。態が理論的に処理しにくい特殊なカテゴリーであることはしばしば指摘されてきた。В. В. Виноградов は態のカテゴリーは「文法と語彙論と語法論の境界線上にあるもので、文法の領域においては、語の形態論よりも、文の統辞論に近く立つもの」と観た〔3/476〕。А. М. Пешковский は「動詞の態のカテゴリーはいくつかの点においてロシア語の文法体系の中でまったく例外的な位置を占めている。なによりもまず、それは本来の意味においてカテゴリーですらない」〔14/113〕。

態を統辞的カテゴリーとして把握し、述語動詞を媒介とした主語と目的語との関係を態の本質と観ている代表的な文法は『ロシア語文法』(1960)である。「態のカテゴリーは動詞の形態において表現される動作主体と客体との関係を意味する。従って、動作の主体と客体とのあいだの関係がすべて態の関係であるのではなくて、動詞において固有の文法形式を得る関係のみが態の関係である。態は-сяに終る再帰形態によって (строить — строиться) あるいは特別な形成 — 受動分詞 (выстроенный) によって形式化される」〔5/§ 669〕。

いま、述語動詞を V (verbum), その文法的主体(主語)を S (subjectum), 文法的客体(目的語/直接補語)を O (objectum) で表記することにする。

『ロシア語文法』(1960)によれば、「動作と主体との関係は動詞の形態の人称語尾によって、人称語尾と主語との人称・数における——ある種の形態では性・数における——一致によって表現される」〔5/§ 669〕。すなわち、S-Vの関係は形態的・統辞的カテゴリーとして理解されている。一方、「動作と客体との関係はロシア語では格支配によって表現される。動詞をその目的語との関係に基づいて分類することは態の体系において重要な意味をもつ。目的語との関係に基づいて、すなわち格との結びつきに応じて、動詞は他動詞と自動詞という二つの大きなグループに分かれる」〔5/§ 669〕。つまりV-Oの関係は <<переходность>> という統辞的カテゴリーであり、動詞を格支配の関係に基づいて他動詞と自動詞に分類することは動詞の語彙の意味にも深く関わっている〔5/§ 672〕から、V-Oの関係は語彙的・統辞的カテゴリーである。

ロシア語において態のカテゴリーにS-V-Oの三項の対立を立てることの本質的な欠陥はS-V-Oの関係の体系の異質性、カテゴリーのレベルの相異が十分に考慮されていない点にある。

『ロシア語文法』(1960)においては態の体系を形成する条件となっているのは他動詞と自動詞の区別であり、他動詞のみが態を形成する。すなわち動作の主体と動作の客体とのあいだの関係における変化を標示する、と考えられている〔5/§ 672〕。自動詞は態に関与していない。他動詞からは能動態(действительный залог), 再帰・中動態(возвратно-средний залог), 受動態(страдательный залог)の三つの態が形成される。能動態に属する動詞は他動詞であり、再帰・中動態と受動態の区別は、他動詞に接辞 -ся が付加された結果生じる変化の性格に応じて行われる〔5/§ 673〕。

再帰・中動態に属する動詞は他動詞から派生された再帰動詞で、接辞 -ся との接合により対格の直接目的語と結合する能力と他動性の意味とを喪失し、動作の主語領域への集中性・閉鎖性の意味を得た再帰動詞のみである。従って自動詞から派生された再帰動詞 (стучать -

стучаться)や対応の非再帰形をもたない再帰動詞 < reflexiva tantum > (бояться, смеяться) は態の相関からはずされる。

このように、1960年版アカデミア文法では形態的・統辞的關係(能動態と受動態)、語彙的・統辞的關係(他動性と自動性)、造語的關係(他動詞とそれから派生される再帰動詞)という、ロシア語の体系の中に存在しながら、相互には間接的にしか相関關係に立っていない關係が一つのカテゴリーに統合されている。他動詞とそれから派生される再帰動詞と受動分詞のみが態のカテゴリーの中に組みこまれ、他の多くの動詞がそこから締め出されることによって態の相関の原理は絶対化される。動詞の一部にしか及ばないようなカテゴリーを立てることは理論的に不備であり、同じ論理を進めて行けば、不完了体形のみ動詞 < imperfectiva tantum > はアスペクトのカテゴリーから、複数形のみ名詞 < pluralia tantum > は数のカテゴリーから締め出されてしまうことになるであろう。

『ロシア語文法』(1960)の態の理解は基本的には A. A. Шахматов の三態対立論に依拠しているものと思われる。Шахматов は『現代ロシア標準語概説』(1925)では能動態、受動態、中動態を区別した。形態的には能動態には語尾に -ся のつかない動詞が属し、語尾に -ся をもつ中動態の動詞と対立するとするが、Шахматов は態の分類を形態によって徹底させず、動詞の意味と統辞機能に基づいて行なった。受動の意味をもつ再帰動詞は能動態に属する -ся のつかない本源他動詞と対応することによって非能動態(受動態)に属するが、受動の意味のない再帰動詞は中動態に編入される。「能動態は主体自身から生起して主体によって行われ、実現される動作・状態を表わす: нести, ходить, глотнуть, богатеть [23/169]。Шахматов による態の区分は -ся のつかない自動詞を能動態に組み入れている点で、他動詞のみを能動態に所属させる『ロシア語文法』(1960)の態の分類と異っているが、бояться, смеяться, толпитьсяなどの reflexiva tantum を能動態の動詞と対応する形態でないために中動態からはずしている点では両者の分類法は一致している。従って、ロシア語動詞は次の二つのクラスに分けられる。1) 態の区別を表す動詞、2) 態の区別を表さない動詞。2) には能動態動詞と同一の形態でありながら -ся と結合しない動詞 (идти, долженствовать, телеграфировать など)と中動態動詞と同じ形態でありながら -ся を取りはずした形があり得ない動詞 (бояться, взгромоздиться など)が属する。そしてこの最後のグループの動詞を Шахматов は < отложительные глаголы > (ラテン語の verba deponentia に相当する)と名づけている [23/170]。

Шахматов は『現代ロシア標準語概説』においては態を S-V の關係の表現形態と定義し、形態論の対象であると考えていた。しかし『ロシア語統辞論』(1941, 第二版)においては、一転して、< категория залога > を < категория объекта > と同一視して、態を統辞的カテゴリーと見なしている。態の形態として表現されるのは動作の主体と客体との關係であり、あるいは、その動作を表す動詞と目的語との結合の不可能性であるとされ、動詞の他動性/自動性の形態特徴が態の基本概念となっている。『現代ロシア標準語概説』で設定された三つの態は基本的なものとして維持されてはいるが、< средний залог > 「中動態」は < возвратный

залог > 「再帰態」と名称が変更されている。「能動態」に属する動詞は、a) 対格の直接補語をとる他動詞、b) 斜格補語(生格, 与格, 造格)をとる斜格支配他動詞、c) 上記の格を補語としてもたない自動詞、の三つのグループである。能動態は形態的には語尾 -ся の不在によって規定される。a) の動詞は受動態の分詞を形成し、また -ся と結合して受動の意味を得

る。b)の動詞は受動態の分詞を形成しないが、-сяと結合して«**косвенно-возвратный залог**»を構成する。c)の動詞グループは受動態の分詞を形成せず、ふつう-сяとも結合しない。**Шахматов**は«**возвратный залог**»をまず«**прямо-возвратный залог**», «**косвенно-возвратный залог**», «**взаимно-возвратный залог**»の三つの基本的な変種に分類し、再帰動詞の意味と用法に応じて、さらに«**собственно-возвратный**», «**обще-возвратный**», «**косвенно-возвратный**», «**косвенно-результативно-возвратный**», «**взаимно-возвратный**», «**пассивно-возвратный**», «**кратно-пассивно-возвратный**», «**страдательно-возвратный**»の下位グループの**залог**を区別した。これらの下位区分の態«**подзалог**»は態のカテゴリーの成員としてではなく、再帰動詞の多義性の意味分類として考察されるべきものである。**Виноградов**はこの**Шахматов**の再帰動詞の態的意味の分類に基づいて、接辞-сяの多義性を分析し、再帰動詞に15の意味を区別した〔3 / 495-500〕。

このように、形態標示がきわめて貧弱であるにもかかわらず、統辞的・語彙の意味に基づいて、態を形態表現を得たカテゴリーとしてよりも意味的分類として観る**Шахматов**およびその後継者たちの態理解と、その延長線上にあって態のカテゴリーを統辞的カテゴリーとして処理したアカデミア文法に対する批判として、**A. B. Исаченко**は『ロシア語の文法構造』の形態論第二部(動詞篇)(1960)において態を明確に形態論のカテゴリーとして把握すべきことを問題提起した。**Исаченко**の態に関する研究は**V. Havránek**の古典的モノグラフィ『スラヴ諸語における動詞の態』(1 / 1928, II / 1937)の態の理解に基づいている。

**Havránek**は論理的・意味的に動詞を動作を表す動詞と状態を表す動詞とに分類する。述語動詞とその主語との関係は動詞そのものの意味に依存し、態の変化を受けるのは動作を表す動詞にのみ固有であるから、**Havránek**は態(**genera verbi**)のカテゴリーを「同じような意味内容がある場合に、動詞の動作の主語に対する関係、ないし、動詞の動作の文構造一般に対する関係が変化するところにおいて成立するもの」と観る〔26 / 14〕。**Havránek**はS-Vの関係態のカテゴリーの決定基準とし、V-Oの関係は問題の外に置いた。**Исаченко**もS-Vの関係のみを固有な態の関係と見なし、V-Oの関係は形態論的カテゴリーではないとして態のカテゴリーからはずした。このことによって彼は態の問題に執拗に絡みついている「非文法的な」概念や用語を排除しようとした。**Шахматов**などの態の理解において問題とされた**agens-patiens**の概念は**Исаченко**においては関心の対象とはならない。「**Дом построен опытным архитектором** “家は熟練した建築家によって建てられた” という文においてわれわれの興味をひくのは純粹に文法的な関係である。すなわち名詞 **дом** は、文法から見れば、文の主語であり(それ以外のなにものでもない)、**опытным архитектором** という語結合は造格に立つ文成分であってそれ以外のなにものでもない。文法の見地からすれば、名詞 **дом** がここでは—— “実は” —— «**動作の現実の客体**»を意味し、«**現実の動作主体**»は**опытный архитектор** であるといったことは、まったく関係のないことである。文法的関係の代用に論理的関係を持ち出すことは文法分析にとってなんの役にも立たない」〔7 / 354〕。

**Исаченко**のロシア語文法研究の特徴は「二項対立」(«**бинарные оппозиции**»)の体系の確立と「不変の意味」(«**инвариантные значения**»)の発見という方法論に基づいて形態論の構成を試みた点にある。

**Исаченко**は主語と動詞の表す動作とのあいだのあらゆる可能な関係のうち、動詞の動作の



主語への方向性を受動態の意味特徴として抽出した。態のカテゴリーの成員は能動態と受動態の二項であり、このうち受動態は明確な不変的標示 ( $S \leftarrow V$ ) をもつために有標項とされ、無標項の非受動態(能動態)とともに非対称的対立を呈示する。「受動構文 **Дом строится (Дом строился; Дом построен)** において動詞によって表された動作は文の主語(дом)に向けられたものとして呈示されている。まさにこの動詞の動作の主語への方向性が受動態を特徴づける一般的な意味特徴である。このような関係は  $V \rightarrow S$  あるいは  $S \leftarrow V$  として象徴的に描くことができる」〔7/355〕。能動態は態の対立の弱い項、無標項であるため「ポジティブな」意味をもたない。例えば、能動態においては主語から動詞への方向性 ( $S \rightarrow V$ ) や主語から目的語への方向性 ( $S \rightarrow O$ ) などは表現されない。二項対立のうちの弱い無標項の一般的な意味は強い有標項の特徴を「非信号化すること」である。この二項対立の原理に基づいてロシア語動詞の態を分類すれば、「 $S \leftarrow V$  の受動の意味をもたない動詞形態はすべて例外なく能動態に属する」ことになり、アスペクトのカテゴリーがロシア語動詞のすべてに及ぶように「態のカテゴリー(受動態/能動態)はロシア語動詞を余すところなくすべて包括する」〔7/356-357〕。従って、『ロシア語文法』(1960)がいわゆる「自動詞」として態のカテゴリーの外に置いた動詞(**бежать, сидеть, вечереть**) および他動詞から派生されていないために「再帰・中動態」からはずされた再帰動詞(**смеяться, бояться, нравиться**) はすべて非受動態として能動態に属することになり、態のカテゴリーに包まれない動詞は一つもないことになった。

Исаченко の提起した問題のうち正当な見解として一般に受容されているのは、態のカテゴリーがすべての動詞を覆うという考え方である。この思考の基礎にあるのは二項対立の原理であるが、相関的な文法カテゴリーの処理法としてこの方法がきわめて有効であることも一般に容認されているが、能動態(非受動態)と受動態という相互排他的な形態の項が対立する場合、それが非対称的・欠性的対立 (*asymmetric, privative opposition*) なのかそれとも等価的対立 (*equipollent opposition*) が問題となるのかは議論の余地があるであろう。能動態と受動態を意味的対抗項として等価的対立と考える立場では *agens - patients* (論理的主体— 論理的客體) の関係は能動構文を受動構文に変形してもなんの変化も受けることがなく、二つの構文は同意的であるという考えが前提となる。**Ученик решает задачу. — Задача решается учеником** (“生徒が課題を解決する— 課題は生徒によって解決される”) という二つの構文において **ученик** は *agens* (動作主体— 論理的主体) であり、**задача /у** は *patients* (動作を受ける客體— 論理的客體) である。この見解に従えば、この二つの構文は、過程的であって動作主体に関連づけられた同一の事態 (**Ученик решает задачу**) が過程的であって動作主体に関連づけられない事態 (**Задача решается учеником**) として表現されることによってのみ、区別される。そのさい、関係は *agens, patients* から文の主語へと変化する。能動構文においては *agens* と文の主語とは同一であるのに対して、受動構文においては *patients* と文の主語とが同一である。

Исаченко は態の論理的・意味的關係を排除したが、彼の主張するところの受動態を特徴づける動詞の動作の主語への方向性 ( $S \leftarrow V$ ) そのものが「擬似形態的」なものであり、この概念は *apriori* に動作を行う者と受ける者とを予想している。

態を形態論のカテゴリーとし、二項成員の対立と観る考え方は最近の文法理論では確実な地歩を占めている。しかし、二項対立理論の中には態のカテゴリーを受動態と非受動態の対立相関とせず、再帰態と非再帰態の対立相関と観る立場もある (Ф.Ф.Фортунатов, R. Jakobson)。

Ф.Ф.Фортунатовは『ロシア語動詞の態について』（1899）と題する論文において形態的特徴に基づく態の分類法を提唱し、後代の態理論に少なからぬ影響を及ぼした。彼は動詞の再帰性の一般的な意味を「他動詞的な特徴の意味を自動詞的な特徴の意味に変える」（21/1155）とにおいて観ている。「ロシア語の動詞には二つの態の形態が分類される。すなわち再帰態（возвратный залог）と非再帰態（невозвратный залог）である」（21/1153）。Фортунатовの形態に基づく（-сяの有無による）再帰性／非再帰性の分類は、ギリシア・ラテン文法のカテゴリーを無批判にロシア語に当てはめようとした当時の文法研究への反動であり、形態と意味との対応に基づいて態の対立の相関を解決しようとした点で改新的な見解であった。再帰性は態の文法カテゴリーの形態として現れる。「ロシア語には二つの態の形態が分類される。すなわち再帰態（возвратный залог）と非再帰態（невозвратный залог）である」（21/1153）。Фортунатовは再帰態から区別されるような特別な形態としての受動態はロシア語の動詞体系になく（受動の意味は再帰態が含有する）、また非受動態としての能動態の動詞形態はない、と考えた。彼は再帰要素-сяの形態的特徴と意味機能の特徴に注目して再帰態の意味内容を明確にした。「われわれが、その起源に基づいて再帰態と呼ぶ他動詞派生の-сяに終わる動詞形態は、いまやその意味上、動詞の非他動詞形態（непереходная форма）であり、非他動態（непереходный залог）の形態として規定し得る」（21/1155）。Фортунатовは＜再帰動詞——非再帰動詞＞の相関が存在するところのみ態の関係を見るが、そのような相関のない動詞（再帰の＜пара＞をもたない非再帰動詞と reflexiva tantum）は態の意味を欠き、従って、態のカテゴリーからはずれる。このことから、態のカテゴリーは他動詞にのみ固有なものという結論が生じる。

このФортунатовの考え方を二項対立の方法を用いて徹底化し、現代化したのは R. Jakobson(1932/1957)である。彼は1932年の論文『ロシア語動詞の構造について』では動詞の態の対立の相関を、一般的には、動作の自動性 Intransivität（有標）::非自動性（無標）——広義の Activa ——の対立であるとし、この対立のうちの非他動性（自動性）という有標カテゴリーの内部にさらに Passiva（有標）:: Reflexiva（無標）の対立の相関を観た。第一の自動性::他動性（非自動性）の対立から成る態の相関は動詞の変化形態(Konjugationsformen)のすべてを包括する。それに対して第二の相関は分詞のみを包む。бояться のようないわゆる reflexiva tantum は第一の一般的な態の相関の中の対偶(pair)の欠けた有標形態であるとされた。1957年の論文『転換子と動詞カテゴリーとロシア語動詞』では動詞の態は再帰態 reflexive voice ::非再帰態 nonreflexive voice の非対称二項対立で処理され、形態的に後接辞 -ся をもつ有標項は非他動性（自動性）を信号化し、無標態に属する非再帰動詞は他動詞でも自動詞でもあり得る〔27/350-351; 28/8〕。

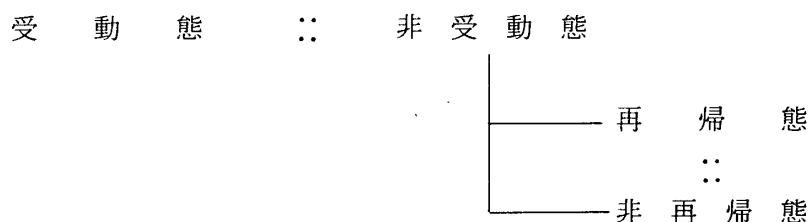
再帰要素 -ся は動詞に「他動性のないこと」（непереходность）を表示する唯一のマーカである。再帰動詞は対格補語を支配しない。この -ся の特性に基づいて、態に非他動性（自動性）と能動性の対立相関を定立させた Фортунатов や Jakobson の見解は形態に最もよく即応した態の処理方法であるように思われる。しかし Фортунатов — Jakobson 理論は一般には受け入れられていない。その理由はいろいろあるであろうが、まず第一に、後接辞 -ся が動詞の述語形態において態の意味を表す形態素であるか否かの問題がある。もし態が述語動詞と主語との関係を表す形態論的カテゴリーであるならば、態は然るべき形態表現をもたな

けれどもならないが、動詞の述語形における **-ся** はそれにふさわしい形態論レベルの（人称語尾と同列の）形態素なのであろうか。一方、**-ся** のつかない非再帰動詞は他動性の形態的表現をもたず、語彙的・統辞的に態の意味をもつにすぎない。**-ся** を態の形態標示と見なさず、動詞の述語形に態を認めない立場もあろう（例えば Л. П. Калакуцкая）〔8/79〕。再帰後接辞 **-ся** を造語法レベルの形態素とし、その語彙的・造語的多義性の一つに「受動」の意味があり、それが偶然「態」の意味と一致するという見方も成り立つ。それとは反対に、**-ся** を人称語尾に近い動詞述語形の要素として積極的に認める立場もある。例えば、А. М. Панов は態（受動／非受動）を動詞の語形変化の形態と観ることにより *passive formative* の **-ся** を語形变化的な形態素 < флексия >（屈折辞，変化語尾）と呼び、他の同音異義的な **-ся** を造語的な形態素 < дериватор >（派生辞）と呼んで両者を区別する。строится (кем-то) の **-ся** は屈折辞で、белеется の **-ся** は派生辞である〔13/83〕。この考え方は一応興味ぶかいが、**-ся** は単独では動詞の述語形態の語尾として人称・数を示し得ないから、**-ся** を含有した人称語尾を、ラテン語の *-r passive* にまねて、受動態語尾と考えるほかはないであろう。そうすると、直接法現在では不完了体動詞の語幹から **-юсь (-усь)**, **-е/и-шьяся, -е/и-тся, -е/и-мся, -е/и-тесь, -ю/-у/-я/-а-тся** の受動態語尾ができるが、1・2人称はほとんど用いられないから、*paradigm* としては体を成さない。態のカテゴリーを再帰態／非再帰態で処理する第二の困難点は受動分詞をどこでどのように取り扱うかの問題であろう。受動分詞を動詞の態のカテゴリーからはずして、受動／非受動の意味は分詞のカテゴリーに固有のものとし、< **быть**（の人称形）+ 受動分詞短語尾形 > を動詞の述語形態とせず < **именное сказуемое** >（名詞的述語）と観ることも可能ではある。しかし、Jakobson 式の分類をロシア語の現実に即した、より有効な態の処理法と考えている人は少ない。

チェコスロヴァキア科学アカデミー版『ロシア文法』（1979）は、しかし、二項対立の原理を徹底させている点では、最も Jakobson 理論に近づいている、と言うことはできる。それによれば、「態のカテゴリーは動作とその動作に参加する基本的な動詞付随成員との相関を表現するカテゴリー圏に属する。態のカテゴリーはこれらの相関のうち次の相関を表現する：(1) 動詞と動作主体への方向性、(2) 動作の方向性の制限とそれに関連する動詞付随成員の役割の変化。これに応じて態のカテゴリーには次のものが属する：

- (1) 狭義の（より文法的な意味における）態，すなわち，受動態と非受動態の対立として表現されるカテゴリー。(2) より広義の態，すなわち再帰態と非再帰態の対立として表現されるカテゴリー」〔17/§ 350〕

このような態のカテゴリーの階層性は次のような図式で示されている。



他の動詞カテゴリーと異って、態の中心的なカテゴリーである受動態::非受動態のカテゴリーの領域は語彙的に厳格に制約を受けている。そのことは多数の対（ペア）を成さない語彙素の存在によって引き起される対立の無標項が量的に凌駕していることから明らかである。

受動態::非受動態と再帰態::非再帰態という二つの態のカテゴリーに付随して他動性::非他動性という特殊なカテゴリーが生じる。他動性::非他動性という語彙的・統辞的カテゴリーは他動詞という語彙的容積をもつことによって態という形態論的カテゴリーの中核部分の容積を規定する。態のカテゴリー（およびそれに付随する他動性::非他動性のカテゴリー）は次のような非対称的構成を示す〔17/ § 351〕。

受動態 :: (非受動態) 非再帰態<sub>1</sub> :: (非受動態) 再帰態<sub>1</sub>  
 умыт умывает умывается

∅	::	(非受動態) 非再帰態 <sub>2</sub>	::	(非受動態) 再帰態 <sub>2</sub>
		белеет		белеется
∅	::	(非受動態) 非再帰態 <sub>3</sub> сапожничает	::	∅
∅	::	∅	::	(非受動態) 再帰態 <sub>3</sub> борется несется "бежит"

Исаченко は「再帰性」(возвратность) を動詞のカテゴリーとは認めず、能動態、受動態のほかに再帰・中動態を設ける「アカデミア文法」などの三態分類説を批判し、умываться, радоваться タイプの動詞を умывать, радовать の「態の形態」(залоговые формы) とは観ずに独立の再帰動詞と解釈した〔7/ 380-381〕。プラハ版「アカデミア文法」は二項対立の原理に立ちながらも「再帰態」(возвратный залог) を設けている点でスラヴ語文法に伝統的な三態分類説に戻っている。

1970年版「アカデミア文法」は広義の態としては次の三つのカテゴリーを認めた：(1) 受動態/能動態の相関、すなわち、主語に向う動作とそのような方向性の指示のない動作との相関で、狭義の態、(2) 他動性/非他動性の相関、(3) 動詞の再帰性。このうち(3)の再帰性のカテゴリーは文法カテゴリーではなく、意味的・造語的カテゴリーとされ、再帰態は認められていない。(3)に属する動詞は再帰動詞であり、そのかなりの部分は受動態の動詞と homonymous である (Они собираются за город “彼らは郊外に出かける仕度をしている”と Грибы собираются дачниками “きのこは別荘の人々によって採集される”) けれども、全体として能動態に属する動詞である。従って、根本的には能動態と受動態の二態が態のカテゴリーの成員と考えられている。

1980年版「アカデミア文法」の態の理解は1970年版「アカデミア文法」のそれとほぼ同一である (動詞の態のカテゴリーの執筆者は両書とも同一人物の Н. С. Авилова である)。態は次のように定義されている：「ロシア語における態は形態的手段と統辞的手段とから形成される文法カテゴリーである。態は意味的な主体と動作と意味的な客体とのあいだの同一の相関の異なる表象によって意味が互いに区別されるところの形態論の諸形態の対立によって形成されるカテゴリーである」〔18/ § 1455〕。このような錯綜した混成的カテゴリーのうち本来的な態の関係は能動構文と受動構文の対立によって表される主体と動作と客体のあいだの関係とされる。態のカテゴリーはすべての動詞に及び、他動詞、自動詞、再帰動詞は能動態か受動態のカテゴリー

に包まれる。

ソ連科学アカデミー・ロシア語研究所は「1970年版アカデミア文法」を公刊するに先立ってその要綱を1966年に発表した。それによれば、文法カテゴリーには二つのレベルが区別される。「純文法カテゴリー」(собственно грамматическая категория)と「語彙・文法カテゴリー」(лексико-грамматическая категория)の二つである。動詞の文法カテゴリーについて言えば、人称、数、時制のように、同一語の変化形態に固有な文法的意味が集って、より普遍的な意味のカテゴリーに統合されているものは「純文法カテゴリー」であり、態やアスペクトのように、文法的意味が個々の諸形にではなく全体としての語に備わっているものは「語彙・文法カテゴリー」である〔12/121-122〕。1960年版アカデミア文法では態のカテゴリーは他動詞からのみ出発し、態のカテゴリーからはみ出す動詞が生じたが、1970年版および1980年版文法では「語彙・文法カテゴリー」である態はすべての動詞を包括する。しかし、態を語彙的・形態的・統辞的カテゴリーとして理解している点では三つのアカデミア文法は共通していると言ふことができる。

### 3 受動態の構造と意味

より狭義の態のカテゴリーは動作の動作主体への方向性::非方向性の特徴の対立に基づいて構成される受動態::非受動態(能動態)のカテゴリーである。受動態::非受動態のカテゴリーが他の動詞カテゴリーと明瞭に異なる特徴は分詞の枠内において実現される等価的(equipollent)な対立である点にある。

受 動 態	::	非 受 動 態
читаемый, разбираемый прочитанный, разбитый (читанный)		читающий, разбирающий прочитавший, разбивший читавший
(читаем) (был читаем) был прочитан, был разбит		читает, разбирает читал, разбивал прочитал, разбил
(быть читаемым) быть прочитанным быть разбитый		читать, разбивать прочитать, разбить
(будучи читаем) (будучи прочитан, разбит)		читая, разбивая

受動態は述語形(人称形)、不定形、副動詞形において分析形となり、態とアスペクトの意味を表す(完了体において結果性の特徴が現れる)。述語形は人称・態・アスペクトのほかには時制・性・数を表す(Окно открыто / было открыто / будет открыто)。

1980年版アカデミア文法は受動態と能動態の述語形式を次のように規定している:「能動態構文と受動態構文は主体と動作と客体のあいだの関係の統辞的表現手段である。ここにおいて形態論的手段となるのは動詞の形態である。能動構文においては他動詞の人称変化形が現れ、受動構文では受動分詞の短語尾形(сражение выиграно)ないし受動の意味を表す後接辞 -сяをもつ動詞の人称変化形(сражение выигрывается)が現れる。能動態構文においては動詞は能動態の動詞、受動態構文においては動詞は受動態の動詞である」〔18/§ 1455〕。

以下、暫く1980年版アカデミア文法に依拠して受動態構文の構成を概観することにする。

受動態が受動過去分詞短語尾形によって表現されるとき(Портрет написан художником — Художник написал портрет), 態の対立は主として完了体の他動詞に特徴的なものである。

不完了体の他動詞においては受動過去分詞短語尾形による受動態構文は稀である: Дом строен был тем же итальянцем (Бунин); Другие части были читаны Сергеем Ивановичем (Л. Толстой)。

不完了体の他動詞においては受動態は受動現在分詞短語尾形によって表現される: Николай был уважаем, но не любим в обществе (Л. Толстой); Как верный ученик, я был ласкаем всеми (Брюсов)。しかし、これらの形はつねに雅語的な文体的装飾の特徴をもち、規則的には形成されない〔18/§ 1460〕。

不完了体動詞には態の対立を示もう一つの表現法として受動の意味を表す再帰動詞による受動態構文がある。能動態の他動詞が用いられる能動態構文(Они постигают добро и зло)に対して再帰動詞による受動態構文(Добро и зло постигается ими)が対立する。再帰動詞の受動態構文においては主として3人称(単数/複数)が用いられ、その他の形態が用いられることは稀である。完了体の再帰動詞が受動の意味をもつ場合も稀である。

態の対立の表現は多くの場合アスペクトに依存する。完了体は受動態を受動過去分詞で表現し、不完了体はそれを再帰動詞で表す。

完了体動詞では能動態の人称形と受動分詞の相関によって態の対立が同一の動詞の異なる形態によって表される(Студенты построили клуб. — Клуб построен студентами)。それに対して、不完了体動詞にあっては態の対立は異なる動詞によって、すなわち能動態の他動詞と受動の意味の再帰動詞によって、表現される(Профессор читает лекцию. — Лекция читается профессором)。このように、異なる語のあいだの関係が文法カテゴリーの中に組み込まれることによって態のカテゴリーは半ば語形変化的で半ば非語形変化的カテゴリーとなっている〔18/§ 1461-1463〕。

ここにおいて注意すべきことは『ロシア文法』(1980)が他動詞とその受動分詞(построят — построен)を同一語の異なる形態、すなわち語形変化のレベルとし、一方、他動詞に対立する受動の意味の再帰動詞(читает — читается)を異なる語、すなわち造語法のレベルと見なしていることである。Л. П. Буланин は態のカテゴリーを「動詞の動作の主語に対する関係を規定する文法形態の体系」、 「能動態と受動態の形態の対立によって表現される動詞の語形変化的カテゴリー」と定義した〔1/150, 156〕。Буланин によれば, разносят と разносятся は動詞 разносить の態の形態であり, победил と был побежден も、同様に、動詞 победить の態の形態であって、不完了体他動詞——受動の意味の再帰動詞の関係と完了体他動詞——受動過去分詞の関係はともに同一語の異なる語形変化の形態と考えられている。

不完了体他動詞からつくられる受動の意味の再帰動詞を造語的に派生された異なる語として、語形変化とは見なさないのは Н. П. Некрасов 以来の見解である。Некрасов はロシア語の動詞は再帰後接辞 -ся の有無により二つの形態しかもたないと考えたが、その形態的分類に文法カテゴリーの特徴を見出さなかった。Некрасов 的見地に立てば、再帰性は文法的には同一の意味(「非他動性」)をもち共通的な造語モデルとして現れるが、受動態、中動態、相互態

などの伝統的に態と観られるものの意味は副次的・偶有的な意味にすぎない〔11/31〕。

Некрасовの動詞理解の伝統に立ち、その動詞分類の原理を継承・発展させた Н. А. Янко-Триницкая は「再帰動詞は、いずれの場合も、造語的な形態、すなわち、さまざまな程度の親疎関係において本源動詞と結びついた個別の独立の語である」〔25/21〕と定義し、再帰動詞の「非他動性」の一般的な文法的意味を再帰要素の語彙的・派生的機能のプリズムを通して観察した。

プラハ版アカデミア文法（1979）は受動分詞と受動の意味の再帰動詞の形態レベルの区別を徹底させて、受動態構文を構成する形態を受動分詞の述語形に限定し、再帰動詞をそこに持ちこまない。再帰動詞は、動作の限定された方向性の特徴に関する対立に基づいて樹立された再帰態∴非再帰態という広義の態のカテゴリーの有標項に所属する動詞であり、そのうち受動の意味を表す再帰動詞は態的な性格の意味の最も類型化された文法的表現手段として受動再帰態を構成する。この受動再帰態の形態は、とくに述語形のパラダイムにおいて十分に機能していない本来の受動態の分析形（он критикуем）の位置に取って替りつつあるもの、と考えられている。不完了体の再帰形による受動の意味の表現はきわめて広く普及しており、規則性をもつために、機能的な用法の領域において受動態の短語尾分詞形との関係において、實際上、配分的分布を成す（дом строился∴дом был построен）〔17/§ 371〕。

受動再帰態の意味と統辞的環境は基本的には受動分詞による受動態の場合と同一であるが、使用の領域において多少の相異がある。再帰受動態の構成法に特殊な制限があるのは再帰後接辞-сяの多義性によるものであり、再帰動詞に受動の意味機能をもたらすいくつかの条件が考えられる。

(1)再帰受動構文には3人称の不活動体名詞の主語が最もしばしば用いられる。(2)不完了他動詞起源の再帰形にはほぼ限られている。(3)造格による動作主体（instrumentalis agentis）が表現されないという一般的傾向がある。(4)受動のニュアンスを強調するために構文中に動作主体の表現が必要となることがあるが、その表現が不可能なときは、他のより適当な表現手段（主として不定人称の構文）に依らざるを得ない。

再帰受動態と受動態とが異なるもう一つの点は、受動の意味の再帰動詞が決して「状態」を表さないことである。

完了体の受動分詞短語尾形から構成される受動態の形態は他の受動態の分析形と異なって、コンテキストによって(1)「動態受動」(« процессуальный пассив », « passivum actionis »)と(2)「静態(状態)受動」(« статальный пассив », « passivum staticum »)の二様の機能を果す。(1)は受動の動作・過程を表す。例えば Клуб построен студентами в короткий срок “クラブは学生たちの手によって短期間のうちに建てられた” ; Магазин был открыт продавцом в 10 часов “店は店員によって10時に開かれた” という構文では分詞は客体によって受身的に知覚される動作の意味をもつが、Клуб построен: Магазин открытのように動作主体を表す造格がない場合には状態の意味が強い〔18/§ 1467〕。

#### 4 態の意味構造

総じて、最近のスラヴ語の態の研究においては統辞構造・意味構造・タイポロジーに重きが置かれるようになってきている。そのような動向のなかで、とくに注目に価するのは1960年代の末から開発されてきたソ連科学アカデミー言語学研究所のレニングラード支部の言語学者グルー

プによる態の理論である。それは、簡単に言えば、「言語の普遍性」(linguistic universals) を指向する態の構造・タイポロジー的研究であり、理論的指導者であった東洋語学者 A. A. Холодович によれば「普遍的、整合的態理論の構築」を課題とし、このカテゴリーの表現に関連する「多様な経験的資料の適確な記述」を試行するものである。Холодович は態を「統辞論のレベルの単位と意味論のレベルの単位のあいだの一致の動詞における規則的な表示」として定義した〔22/284〕。

態の構造的・タイポロジー的研究において最も具体的にロシア語の態に触れている研究として、B. C. Храковский の論文 « Пассивные конструкции »〔20/5-46〕および « Zur Definition von Passivkonstruktionen »〔29/51-62〕を挙げる事ができる。

以下、態のタイポロジー的研究の動向の一端を知るために、上記文献に基づいて Храковский の説を簡単に紹介することにする。

まず彼は次の作業仮説から出発する：「一つの文に含まれている情報はその文の頂点である動詞の語彙的解釈に含まれる情報に等しい」、「状況(ситуация)を命名する動詞には、それぞれ、原則として、意味的参与者(семантические актанты)と統辞的参与者(синтаксические актанты)とがある」。意味的レベル(深層構造)の参与者には、主体(agens), 客体(patients), 受信者, 道具, 場所, 出発点, 到達点などがある。統辞的レベル(表層構造)の参与者は主語と補語である。

以上のような作業仮説から出発して、ロシア語の受動構文は次のような関係として把握される。能動構文が受動構文に変形されるさいに、Agens-Subjectum (Ag=Sb) の関係が破棄される。Agens は受動構文において Agens-Objectum (Obag) として現われるか、あるいはまったく表示されない。受動構文においては Subjectum の位置は Agens によって占められず、状況の他の参与者の一つによって占められるか、あるいは空位のまま置かれる。

いま、態(diathesis)の関係を $\Delta$ で表わし、本源構文を $\Delta_0$ それから派生される構文を $\Delta_1, \Delta_2, \dots$ で表わすことにする。Ag (agens), Sb (subjectum), Pt (patients), V (verbum), Ob (objectum), Ob<sup>rec</sup> (objectum, rectus 対格), Ob<sup>obl</sup> (objectum, obliques 斜格), Adr (addressee)。

ロシア語の受動構文は次のようにモデル化できる。

1.  $\Delta_0$  (Ag=Sb), (Pt=Ob<sup>rec</sup>)  $\rightarrow$   $\Delta_1$  (Pt=Sb), [(Ag=Ob<sup>ag</sup>)]  
Плотники (Sb) строили (V) школу (Ob<sup>rec</sup>)  $\rightarrow$  Школа (Sb) строилась (V) (плотниками (Ob<sup>ag</sup>)).
2.  $\Delta_0$  (Ag=Sb), (Pt=Ob<sup>obl</sup>)  $\rightarrow$   $\Delta_1$  (Pt=Sb), [(Ag=Ob<sup>ag</sup>)]  
Альпинисты (Sb) достигли (V) вершины (Ob<sup>obl</sup>)  $\rightarrow$  Вершина (Sb) была достигнута (V) (альпинистами (Ob<sup>ag</sup>)).
3.  $\Delta_0$  (Ag=Sb), (Pt=Ob<sup>obl</sup>)  $\rightarrow$   $\Delta_1$  (Pt=Ob<sup>obl</sup>), [(Ag=Ob<sup>ag</sup>)]  
Преподаватель (Ag) указал (V) на ошибку (Ob<sup>obl</sup>)  $\rightarrow$  На ошибку (Ob<sup>obl</sup>) было указано (V) (преподавателем (Ob<sup>ag</sup>)).
4.  $\Delta_0$  (Ag=Sb), (Pt=Ob<sup>rec</sup>)  $\rightarrow$   $\Delta_1$  (Pt=Ob<sup>rec</sup>), [(Sb=Ob<sup>ag</sup>)]  
Волки (Ag) съели (V) корову (Ob<sup>rec</sup>)  $\rightarrow$  (У волков (Ob<sup>ag</sup>)) корову (Ob<sup>rec</sup>) съедно (V) (ただし方言)



次に本源構文→派生構文( $\Delta_0 \rightarrow \Delta_1, \Delta_2 \dots \Delta_n$ )の関係のタイポロジーを見ると、およそ次のようになる。

I. одноактантная конструкция (1項参与構文)

(0) V + (Sb=Ag)	Я (Sb) ездил (V)	Ludzie (Sb) chodzili (V)
(1) V	Езжено (V)	Chodzono (V)
(2) V + (Ob=Ag)	Мною (Ob <sup>ag</sup> ) ездено (V)	_____

II. двухактантная конструкция (2項参与構文)

(0) V + (Sb=Ag) + (Ob=Pt)	Молния (Sb) разбила (V) стену (Ob)
(1) V + (Ob=Pt)	Стену (Ob) разбило (V)
(2) V + (Ob=Pt) + (Ob=Ag)	Стену (Ob) разбило (V) молнией (Ob <sup>ag</sup> )
(3) V + (Sb=Pt)	Стена (Sb) разбита (V)
(4) V + (Sb=Pt) + (Ob=Ag)	Стена (Sb) разбита (V) молнией (Ob <sup>ag</sup> )

III. трехактантная конструкция (3項参与構文)

(0) V + (Sb=Ag) + (Ob <sup>rec</sup> =Pt) + (Ob <sup>obl</sup> =Adr)
(1) V + (Ob <sup>rec</sup> =Pt) + (Ob <sup>obl</sup> =Adr)
(2) V + (Ob <sup>rec</sup> =Pt) + (Ob <sup>obl</sup> =Adr) + (Ob=Ag)
(3) V + (Sb=Pt) + (Ob <sup>obl</sup> =Adr)
(4) V + (Sb=Pt) + (Ob <sup>obl</sup> =Adr) + (Ob=Ag)
(5) V + (Sb=Adr) + (Ob <sup>rec</sup> =Pt)
(6) V + (Sb=Adr) + (Ob <sup>rec</sup> =Pt) + (Ob=Ag)

ロシア語では (1)、(2)、(4) の受動派生構文が可能、または場合により (1)、(2) が可能。

英語では (3)、(4)、(5)、(6) の受動構文が可能。

例えば \_\_\_\_\_

(0) Отец (Sb) подарил (V) брату (Ob <sup>obl</sup> ) книгу (Ob <sup>rec</sup> )
(1) Брату (Ob <sup>obl</sup> ) подарили (V) книгу (Ob <sup>rec</sup> )
(3) Книга (Sb) подарена (V) брату (Ob <sup>obl</sup> )
(4) Книга (Sb) подарена (V) брату (Ob <sup>obl</sup> ) отцом (Ob <sup>ag</sup> )
(0) Преподаватель (Sb) указал (V) Меше (Ob <sup>obl</sup> ) на ошибку (Ob <sup>rec</sup> )
(1) Меше (Ob <sup>obl</sup> ) указано (V) на ошибку (Ob <sup>rec</sup> )
(2) Меше (Ob <sup>obl</sup> ) указано (V) на ошибку (Ob <sup>rec</sup> ) преподавателем (Ob <sup>ag</sup> )
(0) He (Sb) gave (V) me (Ob <sup>obl</sup> ) a book (Ob <sup>rec</sup> )
(3) A book (Sb) was given (V) to me (Ob <sup>obl</sup> )
(4) A book (Sb) was given (V) by him (Ob <sup>ag</sup> ) to me (Ob <sup>obl</sup> )
(5) I (Sb) was given (V) a book (Ob <sup>rec</sup> )
(6) I (Sb) was given (V) a book (Ob <sup>rec</sup> ) by him (Ob <sup>ag</sup> )

ロシア語の受動構文は次の二点が注記される。

1) 論理的には可能な受動構文の構成のすべてが実現されることは稀である。

$\Delta_0$  Молния (Sb) разбила (V) стену (Ob)  $\rightarrow \Delta_1, \Delta_2, \Delta_3, \Delta_4$

$\Delta_0$  の主語の位置に молния の代りに рабочий を置くと  $\Delta_2$  は実現しない。

- (0) Рабочий (Sb) разбил (V) стену (Ob)  
 (1) Стену (Ob) разбили (V)  
 (3) Стена (Sb) была разбита (V)  
 (4) Стена (Sb) была разбита (V) рабочим (Ob<sup>ag</sup>)  
 Стену разбили と Стену разбило は V + (Ob = Pt) という統辞的 invariant の形態的変種。

2)  $\Delta_0$  の主語の位置を人間が占めるか人間以外の主体が占めるかによって  $\Delta_1$  の V が異なる。

- $\Delta_0$  Враг (Sb) ранил (V) солдата (Ob) →  
 $\Delta_1$  Солдата (Ob) ранили (V)  
 $\Delta_0$  Пуля (Sb) ранила (V) солдата (Ob) →  
 $\Delta_1$  Солдата (Ob) ранило (V)

$\Delta_1$  の主語の位置は空席になる。ドイツ語の場合は  $\Delta_1$  の主語の位置は寒がる。

- $\Delta_0$  Der Arbeiter (Sb) baut (V) ein Haus (Ob) →  
 $\Delta_1$  Man (Sb) baut (V) ein Haus (Ob)

- $\Delta_0$  V + (Sb = Ag) + (Ob = Pt) Командир (Sb) приказал (V) солдатам (Ob) стрелять (V) →  $\Delta_1$  V + (Ob = Pt)

- (1a) Солдатам (Ob) приказали (V) стрелять (V)  
 (1b) Солдатам (Ob) было приказано (V) стрелять (V)

以上のことから、結論的に次のように言うことができる。

語彙的に表現されている具体的な主体 ( субъект ) が主語 ( подлежащее ) の位置を占めないような派生構文は受動構文である。

受動派生構文 ( $\Delta_1, \Delta_2, \dots, \Delta_n$ ) においては本源的な能動構文 ( $\Delta_0$ ) に特有の「主体 ( субъект ) — 主語 ( подлежащее )」の対応関係が破壊されている。— これは受動構文の universal は性質である。

伝統的な文法で「不定人称文」、 $\langle$ 無人称文 $\rangle$ とよばれている構文の一部が、Храковский の定義に従えば、受動構文に入ることになる。

- Книгу (Ob) отправили (V)  
 Бойца (Ob<sup>rec</sup>) ранило (V) осколком (Ob<sup>ag</sup>)

## 参 考 文 献

1. Бондарко А.В., Буланин Л.Л. Русский глагол. Л., 1967.
2. Буланин Л.Л. Трудные вопросы морфологии. М., 1976.
3. Виноградов В.В. Русский язык (Грамматическое учение о слове) Изд. 2-е., М., 1972.
4. Головин Б.Н. Еще раз о категории залога современного русского глагола. В кн. «Исследование по славянской филологии» (Сборник, посвященный памяти академика В.В. Виноградова). М., 1974.
5. Грамматика русского языка. т. I. Изд. 2-е. М., Изд-во АН СССР, 1960.
6. Грамматика современного русского литературного языка. М., «Наука», 1970.
7. Исаченко А.В. Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология, II. Братислава, 1960.
8. Калакуцкая Л.П. Залог в предикативных формах и в причастиях. - «Русский язык в школе», 1968, №6, 100-104.
9. Королев Э.И. О залогах русского глагола. В кн. «Мысли о современном русском языке». М., 1969.
10. Мучник И.П. Грамматические категории глагола и имени в современном русском литературном языке. М., 1971.
11. Норман Б.Ю. Переходность, залог, возвратность (на материале болгарского и других славянских языков). Минск, 1972.
12. Основы построения описательной грамматики современного русского литературного языка. М., «Наука», 1966.
13. Панов М.В. Русский язык. в кн. «Языки народов СССР. т. I. Индоевропейские языки». М., 1966.
14. Пешковский А.М. Русский синтаксис в научном освещении. Изд. 7-е. М., 1956.
15. Потехня А.А. Из записок по русской грамматике. т. IV. вып. II (глагол). М., 1977.
16. Проблемы теории грамматического залога. Л., 1978.
17. Русская грамматика. т. I - II. Academia Praha. 1979.
18. Русская грамматика. т. I. М., «Наука», 1980.
19. Степанов Ю.С. Вид, залог, переходность (Балтославянская проблема. I/II). «Серия литературы и языка» 1976 №5/1977 №2.
20. Типология пассивных конструкций. Диатезы и залогов. Л., 1974.
21. Фортунатов Ф.Ф. О залогах русского глагола. Изв. ОРЯС АН. т. IV. кн. 4. 1899. 1153-1158.
22. Холодович А.А. Проблемы грамматической теории. Л., 1979.
23. Шахматов А.А. Очерк современного русского литературного языка. Л., 1923 (Reprint 1969)
24. Шахматов А.А. Синтаксис русского языка. Изд. 2-е. Л., 1941 (Reprint 1963)
25. Янко-Триницкая Н.А. Возвратные глаголы в современном русском языке. М., 1962.
26. Navránek V. Genera verbi v slovanských jazycích. Praha, I 1928/ II 1937.

27. Jakobson R. Zur Struktur des russischen Verbums. (1932).  
In: Vachek J. (ed.) «A Prague School Reader in Linguistics».  
Bloomington, 1964.
28. Jakobson R. Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb.  
Russian Language Project. Harvard Univ. 1957.
29. Satzstruktur und Genus verbi. «Studia grammatica» XIII.  
Akademie der Wissenschaft der DDR. Berlin, 1976.
30. Szlifersztejnowa S. Kategoria strony (Z historii myśli  
lingwistycznej). Ossolineum, 1969.
31. Gabka K. (ed.) Die russische Sprache der Gegenwart.  
Bd. 1-4. 1974 - 1978. (Bd. 1. Phonetik und Phonologie/Bd. 2.  
Morphologie/Bd. 3. Syntax/Bd. 4. Lexikologie).

## II 時制 ( ВРЕМЯ ) のカテゴリー

### I 時間表現 ("Темпоральность") と 時制 ( категория времени )

"Темпоральность" は陳述と時間との関係を表わすあらゆる表現の可能性を包括する概念——言語体系のさまざまなレベルの手段(形態的・統辞的・語彙的手段)によって表現されるばかりではなく、文脈や発話状況によっても表現される機能的意味的カテゴリーである。

"Темпоральность" の最も重要な形態上の表現手段は категория времени であるが、それと並んで modus, aspect のカテゴリーも時間表現に関連する。

時制の文法カテゴリーは modus のカテゴリーと密接に結びついている。それぞれの文が、原則として modus の一つに連らなっているのと同様に、直説法 (изъявительное наклонение) に立つそれぞれの文は時制に連らなっている。

### II 時制 ( категория времени )

時制の形態的カテゴリーは総合的動詞形態および分析的動詞形態によって表現される直説法の時間の文法的意味を包括する。接続法 (сослагательное наклонение) と命令法 (повелительное наклонение) の形態も時間の意味をもち得るが、時制のカテゴリーはそこにはない。

時制 \ 体	不 完 了 体	完 了 体
過 去	открывал	открыл
現 在	открываю	открою
未 来	буду открывать	

時制(テンス)と体(アスペクト)はそれぞれ独立の文法カテゴリーでありながら、相互に緊密に関係し合うカテゴリー。時制の paradigm はアスペクトに依存する。aspect-tense forms は五つ。

一方、アスペクトの機能は時称(план времени)に依存する。時称は、そこにおいてアスペクトが機能する場所であり、多くの場合、アスペクトの用法の法則性を規定する場所である。

### III 文法的発話時 ( грамматический момент речи )

ロシア語の動詞の時制のカテゴリーは現在(настоящее), 過去(прошедшее), 未来(будущее) という三つの文法的意味から成り立っている。陳述と時間とのあいだの関係の、時制のカテゴリーによって文法化された表現は、直接、現実の時間に立って定位されるのではなく、文法的発話時に立って定位される。

「言語外の発話時と言語的・文法的発話時とを区別する必要がある。言語外の発話時は客観的な時間の要素である。話者は動作の時を自分の発話の時から規定するが、その時は言語の外にある。ちょうど、客観的な現実の動作、対象、関係が言語の外にあるのと同じように。文法的な発話時は現実的な発話時の言語における反映である。それは言語体系の要素である。それはロシア語動詞の時制体系そのものの中に、時制体系の示差的意味特徴の中に含まれている」(Бондарко)

#### IV 文法的発話時と時称

「時制のカテゴリーは時間軸の上における動作／状態の位置決定の特別の文法的写像である。動作／状態の時間軸上の位置決定の基準測点は発話時である。発話時は出来事の言語的表現における唯一の方位標点で、それに基づいて発話の当事者が動作を現在／過去／未来という三つの時称の一つに位置づけるものである」

「時制のカテゴリーの体系の設定原理となっているのは二つの特徴に基づく対立である。すなわち、動作／状態が発話時に先行する（過去形： переписал, переписывал）という特徴と、動作／状態が発話時に後行する（未来形： перепису<sub>2</sub>, буду переписывать）という特徴に基づく対立である。過去と未来は時称のカテゴリーの有標項としてそのポジティブな意味特徴によって相互に対立するが、ポジティブな意味特徴によって区別されるこの二つの項は、現在形で表わされる無標項（ перепису<sub>1</sub>, переписываю）と対立する」

動作／状態の		動作／状態の	
発話時に対する <u>先行性</u>	∴	発話時に対する <u>非先行性</u>	
(過去時称)		(現在時称, 未来時称)	
	∴		
		動作／状態の	動作／状態の
		発話時に対する <u>後行性</u>	∴ 発話時に対する <u>非後行性</u>
		(未来時称)	(現在時称)

[Русская грамматика 1, Academia Praha, 1979, §215]

##### 1 過去時称

発話時よりも以前にあるものとして動詞によって表現された事態。

- (a) 不完了体過去形——発話時に先行し、展開されつつあるプロセスとして知覚されるという基本的意味により、一回的な動作／状態、あるいは継続的に反復される動作／状態を表わす。

**Нередко мы встречались на лекциях.**

**Ночью морозило. Заборы трещали от стужи.**

**Около стен громоздились шкафы; надо мной дымилось пасмурное небо, а окно слепило, как разрыв в облаках.**

**За окошком моросил дождь. По освещенному стеклу скользили черные иглы теней.**

- ▶ 不規則な時点において反復された動作、時間軸の上で輪廓の明瞭な場を占めない抽象的な動作／状態。
- ▶ 展開されつつある出来事の進行を叙述する文学ジャンル（小説）のスタイルに用いられる。
- ▶ 客観的な過去に関係する動作／状態の経過的な知覚を強調的に表現する「主観的」用法、——対話文における強い否定の答。

**Это ты выдвинул такой вопрос? — Я никаких вопросов не выдвигал.**

- (b) 完了体過去形——二つの意味特徴に関して対立の有標項：時制（発話時に先行すること）、アспект（動作の統合的知覚）。発話時以前に完結した動作を表わす。

**Я слишком устала, в кино не пойду. (<перфектное> значение)**

<перфектное значение> は状態ないし状態の変化を表わす動词语彙に最も顕著にあらわれる。

Сад расцвел; Деньги исчезли; Он ослеп, покраснел...

▶ 過去の時を明確に示す状況語があるコンテキストでは<перфектное значение>は失われる。Граф тогда всю знать к себе в театр пригласил;  
В 1928 г. наша семья переехала в Москву.

▶ 時間軸上の動作の逐次性・継起性のニュアンスが並立複文の連鎖的文脈の中で強まる。  
Алеша уселся за стол, раскрыл книгу, надел очки и стал заниматься.

## 2 現在時称

動作／状態の発話時に対する先行性も後行性も表わさない。

- (a) 不完了体現在形——時制の対立においてもアスペクトの対立においても無標項：発話時と同時に実現される動作／状態を表わす。あるいは発話時の境界を過去の方へも未来の方へも押し広げることにより発話時を内に含み得る動作／状態を表わす。

Члены комитета как раз проводят совещание. [ — 発話時と同時に実現される一回的な動作。"актуальное настоящее" ]

По четвергам он посещает библиотеку. [ "неактуальное настоящее" ]

▶ 直接話法の対話文、ルポルタージュ風の叙述に不完了体現在形の基本的な意味が最も明瞭にあらわれる。

▶ 反復的・慣習的動作／状態を表わす（上例参照）。

▶ 慣習性の結果として主体の特性を表わす。Я не курю = Я не курящий.

▶ 動作主の資格を表わす。

Павел работает в научно-исследовательском институте.

▶ 動作主の能力を表わす。

Ольга прекрасно поет; Наш ребенок уже говорит.

▶ 「時間外的」な、恒常的、普遍的な動作を表わす。

Земля вращается вокруг солнца; Рыба дышит жабрами; Правда глаза колет; Пуганая ворона куста боится.

- (b) 完了体現在形——時制の対立の無標項として発話時に先行も、後行もしない動作を表示するが、動作の комплексность (целостность) の特徴に関して有標性をもつために、発話時と同時に現実に実現される動作を表わすことができない。—— "неактуальное настоящее", 時間関係において普遍的な "вневременное" な動作を表わす。

▶ 慣習的な動作を表わす。

Конечно, найдутся люди, которые, читая эти поучительные заметки, раздраженно скажут: - Что же это такое!

▶ 慣習性の結果、主体の性格を表わす。

Она приоденется, если в хорошем настроении.

▶ 主体の動作遂行能力／不能力、用意／不用意を表わす。

Он тебе всегда поможет; Лодка поднимет до пяти человек; Вас и не узнаешь! Не придумаю, как выйти из этого положения.

- ▶ 動作の否定的評価に結びついた主観的強調のニュアンスを示す。  
За товарищей, за дело - я все могу. И убью. Хотя сына...
- ▶ 慣習性が語彙的に(動詞ないし助詞 бывает により)外顯的にあらわれることがある。  
Но бывает и так, что почта вдруг доставит вам корзину с заказанными культурами - ура!
- ▶ 「時間の外にある」知覚の印象は恒常性・普遍性の概念と結びつき、普遍人称文ことに諺、格言などにあらわれる。  
На всех не угодишь; Змеею обойдешь, а от клеветы не уйдешь; Из черного не сделаешь белого.

### 3 未来時称

発話時よりも以後にあるものとして動詞によって表現された事態。

- (a) 不完了体未来形—— <буд=> + infinitive (不完了体動詞) で構成される分析形。

発話時よりもあとに来る時点における動作/状態を表わす。

Через неделю мы будем вас опять ждать.

- ▶ 具体的・一回体動作を表わす。

Делайте ваше дело не спеша - а мы пока вот с этим смертным будем наслаждаться красотами природы...

- ▶ 反復的・恒常的動作を表わす。

Теперь каждую неделю буду писать тебе...

- (b) 完了体未来形——形態的には完了体現在形と同一。動作/状態の発話時のあいだに始まっていることはあり得るが、その結果はかならず発話時以後の時点に移される事態を表わす。

Вечером я к тебе приду. [未来]

Я попрошу остаться товарищей X и T.... [動作の開始は発話時と

А я вам скажу, что ... [一致し得る]

Я доложу вам о работе цеха за истекший год.

Садись, я тебе сейчас сводку всех писем продиктую. [未来]

Сейчас хозяин придет, ужинать будем. [未来: 完了体現在=未来形と不完了体未来形が並存]

- ▶ 不完了体未来 (буду открывать) と完了体未来 (открою) の意味の相異 ◀
- ▶ буду открывать は完全に未来に属する動作を表わし, откроюは現在と結びついた未来を表わす [一般的な見解]。
- ▶ 「完了体未来形によって表わされる動作は, 言わば, 現在時称から出て, そのプロセスの完結時, その結果において未来時称へと伸び, 一方, 動作の開始は現在時称に属し得る」 [В.В. Виноградов]
- ▶ открою は未来と非現実的現在の意味をもつ形態, буду открывать は未来の意味をのみもつ形態で, 二つの形態はその意味の「時間範囲」の上で一致しない。 [Бондарко]
- ▶ 不完了体未来形は動詞によって表わされた動作が発話時以後に位置することを常に表現するが, それに対して完了体現在=未来形は動作が発話時のあいだにすでに生じ, 動作の結果が発話時以後に持ち越されることにおいて未来の意味を表わす。従って, 同一の文または並列文の中で同一の事柄が不完了体現在形と完了体現在=未来形とによって表現される。



Социализм спасает и спасет человечество от опасности новой мировой войны.

不完了体未来は発話時に対してこのような仕方では関連しない。同一の文の中で不完了体未来形が不完了体現在形と並存している場合には、一つの事柄が語られているのではなく、内的な相関関係にない、同じような種類の二つの事柄が語られている。

Работал он вчера, работает сегодня, и завтра будет работать.  
[K. Gabka. Die russische Sprache der Gegenwart. Bd. 2. 1975, s. 145-6]

## V 時制形態の転位的用法 (переносное употребление времен)

時称形の直接的用法においてはコンクストがその時間的意味を具体化し、明確化する。動詞の状態がコンクストと一致する。時制の転位法においては動詞形態の時の意味とコンクストの時間関係とのあいだにずれが生じる。

### 1 不完了体現在形

時制とアスペクトの特徴に関して無標であるため、転位的に用いられる可能性が大きい。

#### (a) <praesens historicum> (<настоящее повествовательное>)

- ▶ 過去において生じた動作が発話者によって目前に展開しつつある場合として描かれる。このような様式化は不完体現在形の用法に限られる。そのさい、不完了体現在形は状態ないし反復される動作の描写に用いられるばかりでなく、物語の進行をある一回の出来事に限定する事実の描写に用いられる。「ルポルタージュ風」描写。

Варька моет листницу, убирает комнаты, потом топит другую печь и бежит в лавочку. Работы много, нет ни одной минуты свободной. (Чехов. Спать хочется)

Вчера я сiju в трамвае. Входит контролер и спрашивает мой билет. Я сую руку в карман. Билета нет. Куда он делся? Ведь я совал его в карман-то.

В это время, из толпы народа, вижу, выступил мой Савельич, подходит к Пугачеву, и подаёт ему лист бумаги (Пушкин. Капитанская дочка)

- ▶ 直接話を導入する文において広く用いられる。

Тереза повеселела, улыбнулась и говорит бабушке: "Ну вот, бабушка, мне кажется, теперь у меня все прошло."

Я обратился к нему и спрашиваю: - Что тебе еще надо?

- ▶ 「記録風」用法。3人称を主語として記述され、時の状況語がある。伝記・論説・追悼文・歴史記述などスタイルの上で限られた叙述的ジャンルにおいて用いられる。

#### (<praesens tabulare>)

В 1937 г. выходит книга Ж. Вандриеса "Язык" с примечаниями Петра Саввича Кузнецова.

После Петра I. во внутреннюю жизнь государства входит еще новое важное условие.

- ▶ 戯曲のト書 (ремарка) — 登場人物の直接話法を導入する文 — に用いられる。

Сигелиус (берет перо и пишет. После паузы.) Войдите!  
 Маршал (пишет так, что ломается карандаш. Крюг подает ему  
 другой.) Вот диспозиции для воздушных сил.

<註1> Русская грамматика 1. Academia Praha, 1979 (§222)は戯曲  
 のト書きの不完了体現在形の用法をルポルタージュ風および記録風のpraesens historicum  
 と区別される, 別種の固定した転位的用法と見なす。Н.С. Поспеловの見解もほぼ同様。  
 しかし А.В. Бондарко はこれを <сценическое настоящее> (“舞台上”の  
 現在)とよび, 転位法と見ないで不完了体現在形の直接的用法で, “説明の”現在とともに,  
 “非現実的現在”の意味と考える。

<註2> Бондарко は <praesens historicum> と並ぶべき不完了体現在形の転  
 位的用法として <настоящее эмоциональной актуализации> (“感情発現の  
 現在”)と称する用法を設ける。話者の驚きあるいは憤慨をひきおこした過去の事実を感  
 情的に強調して表現する。

Полиция, не разобрав смысла, представила письмо государю,  
 который сгоряча также его не понял... Однако какая глубокая  
 безнравственность в привычках нашего правительства!

Полиция распечатывает письма мужа к жене и приносит их  
 читать царю (человеку благовоспитанному и честному), и царь  
 не стыдится в том признаться — и давать ход интриге,  
 достойной Видока и Булгарина! (Пушкин, Дневники)

Двенадцать лет трудился он над этой задачей, двенадцать  
 лет писал он второй том «Мертвых душ», писал, переписывал,  
 переделывал и все не считал оконченным, ни раз не мог удовлетво-  
 риться... И вот он сам сжигает их и, сжегши, умирает.  
 Все это полно страшного, огромного смысла.

(Письмо И.С. Аксакова И.С. Тургеневу от 26 февраля 1852 г.)

- ▶ “感情発現の現在”があらわれるコンテクスト: 一定の状況に対して, 話者の驚きな  
 いし憤慨をよびおこす(しばしば突然の)事実が対比される。

..., а / и вдруг / а тут вдруг / и вот + <不完了体現在形>

[Бондарко А.В. Вид и время русского глагола, стр. 150-153]

(b) 未来時称への転位 <praesens pro futuro>

- ▶ 予定の行動(とくに移動・持参の心積り・決意)を表わす。

Через год он уезжает в Англию.

После обеда мы идем в сад.

Что ты берешь завтра с собой в самолет?

## 2 完了体現在形

発話時に関しては無標, комплексность (целостность) に関しては有標な性格のため,  
 転位的用法には制限がある。

- ▶ 過去における慣習的な反復動作を表わす。慣習性・反復性は порой, изредка,

время от времени, иногда などの状況語, 助詞 бывало によって外顯的に表わされ, 複文では並立接続詞 то - то, тут - там によって動作の交替性, 同時性が表現される。

Иногда медленно проползет от торфяников воз.

Порой мелькнет кто-нибудь в тумане и пропадет.

Вспомнишь, бывало, о Карле Иваныче... и так жалко станет, так полюбишь его, что слезы потекут из глаз...

(Л. Толстой)

Ветер то прошелестит в кустах, закачает ветки, то совсем замрет.

И похоже это, как в церкви, перед утреней... Еще священник не пришел, а народ уже собирается, там зажгут свечу, тут затемят и понемножку гонят темноту.

- ▶ 過去の一時的動作を <praesens historicum> として様式化することは不完了体現在形によってのみ可能。
- ▶ как, да как, как вдруг + <完了体現在形> によって過去の動作の突然の到来を表わす。この用法は完了体現在形の転位法のうち周位的。  
... Так я ему ответил. А он как осерчат. (А. Толстой)  
Герасим глядел, глядел, да как засмеется вдруг. (Тургенев)

### 3 不完了体過去形

不完了体過去形は動作/状態の発話時への先行性という特徴に関して明瞭に有標化されているために他の時称への転位用法はない。[Русская грамматика 1, Прага, §229]

<註> Бондарко は不完了体過去形の転位的用法はきわめて稀であるとしながら, 次の用法を認めている。

- ▶ “抽象的現在”を示すコンテキストで不完了体過去形が perfectum の意味で用いられる。

[Митрич] Миллионов сколько баб вас да девок, а все как звери лесные. Как выросла, так и помрет. Ничего не видала, ничего не слыхала. Мужик - тот хоть в кабаке... а ли в солдатстве, как я, узнает кое-что. А баба что? (Л. Толстой. Власть тьмы)  
не видала, не слыхала は過去の結果が現存している状態を表わし, 文脈は格言的な性格をもち, 普遍的現在の意味を強調する。

- ▶ 不完了体過去形による動作のアイロニカルな認定が現在時におけるその動作の事実上の否定を表わす (俗語的表現)

- Чего она тебе, на самом деле, повернуться не дает! - Да ну, боялся я ее! [т. е. не боюсь] - отвечал Плещеев (Панова)  
Плакали мои денежки [孤立的慣用語法]

[Бондарко, ук. со., 141-142]

### 4 完了体過去形

完了体過去形に固有な, 結果として残存する状態を表わす構造的意味により, 発話時のあとの

位置（未来時称）への転位が可能となる。

▶ Мы погибли, мы пропали のタイプ、動作の到来の確かさの modal な用法。

[Матвей] Ну, сохрани бог, украдут что-нибудь у нас - пропал я! и поделом пропал: затем не уберег братского добра (Тургенев, Безденежье)

▶ 文法的発話時点が現実の発話時点のあとに移される。

Ну хорошо, ну положим, я вышел из университета, положим, поступил куда-нибудь на службу, а дальше что?

▶ 非現実の現在によって叙述される出来事に対する以前性を強調する。

Каштаны цветут весной, когда только что распустился молодой лист.

## 5 不完了体未来形

転位的用法は稀

▶ 不完了体現在形の代りに不完了体未来形が用いられる場合、出来事の出現の確信、動作に対して用意ができていることなど、modal なニュアンスが表現される。

В литературе, как в жизни, нужно помнить одно правило, что человек будет тысячу раз раскаиваться в том, что говорил много, но никогда, что мало (А.Ф. Писемский)

## VI 時制の相対的用法 (относительное употребление времен)

ロシア語には相対的な時間関係を表わす特別な動詞の形態はなく、動詞の人称定形が絶対的にも相対的にも用いられる。動詞の表わす動詞の時が話者の実際の発話時に基づいて定位されている場合の時制の用法を“絶対的用法”とよぶ。例：Он торопится. Мы вернемся. それに対して、動作の行われる時が、発話時にかかわりなく、別の動作の時あるいはなにかの時点の視点から決定される場合の時称形の用法を“相対的用法”とよぶ。例：Я видел, что он торопится.〔過去の時と同じという同時性の相対的意味が不完了体現在形によって表現される〕 Я думал, что мы вернемся.〔過去の時に対する以後性〕

時制の相対的用法においては時称形の意味が推移する：過去形→以前性 (Vorzeitigkeit), 未来形→以後性 (Nachzeitigkeit), 現在形→同時性 (Gleichzeitigkeit)。

Мать писала, что купила мне подарок. — 以前性

Мать писала, что купит мне подарок. — 以後性

Мать писала, что болела. — 以前性

Я обещал, что буду ему писать. — 以後性

Больной лежал на диване и слушал, как жена ходит в кухне. — 同時性

Князь Андрей не только узнал, что он умрет, но он чувствовал, что он умирает, что он уже умер наполовину (Л. Толстой. Война и мир) — 以後性, 同時性, 以前性



### III 直説法 (изъявительное наклонение, modus indicativus)

直説法の形態の基本的な機能は動作の確認 (констатация действия) を意味することにより、動作は、発話のさいに、リアルなものとして表象される。直説法の特別な標示形式 (аффикс や частица) はなく (表現面における形態的無標性が内容面における意味的無標性に対応する)、直説法の形態の役割は時制形が代行する。

Вчера я купил хорошую книгу, посмотри.

...А ему я очень много писала. Пишу теперь. И всегда буду.

▶ 直説法は語彙的手段によって非現実のニュアンスの **МОДАЛЬНОСТЬ** を表現し得る。

Разве он это знает?

Он, может быть, уехал.

▶ 直説法の形態の転位的用法 ◀

「直説法の特質は、それが語彙的・文法的手段によりあるいはコンテキストによりさまざまな叙想的なニュアンスを表現する可能性に制限を課していないことにある」

[АН СССР Русская грамматика, стр. 619б]

a) 完了体の現在=未来形は音調によって命令の意味をもち得る。

Завтра же ты пойдешь и скажешь ему об этом!

Вернитесь, поедете с нами. Забирайтесь-ка в мои сани.

b) ある種の動詞、とくに動作の発展段階を表わす動詞 (начать, кончить, пойти, побежать, поехать, поплыть, взять, взяться) においては、完了体の過去形は命令の意味をもつ。

Дружно, вместе начали!; Кончили разговоры!; Поехали!; Пошел вон!

c) コンテクト全体が動作の非現実性を表わす場合、直説法の過去形が接続法に近い意味を表わす。可能な動作が実現され得るものとして仮定される。

Ах ты какой, Федя; ну, послал <=послал бы> кого за водкой - и вся тут.

Повесть мою или напечатают, или не напечатают. Ну, (положим), ее напечатали, я получил гонорар. Разве от этого я стал писателем? (- ср. более экспрессивное ... ну, ее печатают, я получаю аванс... Значит ли это...?)

[Academia Praha Русская грамматика, стр. 186]

<註> 動作の確認の意味機能をもつ直説法の形態のうち、“最もリアルなもの”として表現されるのは、おそらく、過去の動作であろうが、その“最もリアルなもの”でさえ、仮定性のみを表現し得ることがある。しかしながら、一般に、直説法過去形は、他の時称形に比して、**МОДАЛЬНОСТЬ** に関して転位の可能性は小さい。

### IV 命令法 (повелительное наклонение, modus imperativus)

命令法は単数ないし複数の動作の行ない手による動作が現実に行われるべきであるという話者の要求を表現する。命令法の意味は喚起機能にあり、命令・忠告・警告・依頼・訓戒などを表わす。

1) 2人称——対話相手・伝達の受信者への要求。

работай :: работайте

скажи :: скажите

верь :: верьте

- 2) 3人称——単数ないし複数の人間への要求、ときにはある対象（とりわけ自然現象）への要求。  
〈助詞 пусть / пускай ( / да — 雅語的) + 直接法 3人称現在・未来形単数／複数〉の統辞形式で表現される。

Пусть он придет!; Пусть веселятся!; Пусть сильнее грянет буря!; Да здравствует солнце, да скроется тьма!

〈註1〉 Academia Praha «Русская грамматика» はこの表現形式を形態論のカテゴリーからはずして、синтаксическая модальность を表わすものとして統辞論の領域で記述する [указ. соч., 1, §8252 <примечание>; 2, §1298]; АН СССР «Русская грамматика» は形態論のレベルで記述している。  
[указ. соч., §1480]

〈註2〉 助詞 пусть, да は1人称, 2人称の形態とも結合する。(例 Пусть я расскажу! Пусть мы будем первыми; Пусть вы пойдете.)

- 3) 1人称複数——inclusive imperative (инклюзивные формы): 話者が自分と共同に行われるべき動作を要求する。

Пойдем (Пойдемте) в город!  
Давай пойдем (Давайте пойдете) в город!  
Давай (Давайте) говорить об этом!

〈註〉 Дай / дайте, давай / давайте は1人称の直接法現在／未来形と結合し、話し手に動作の遂行の許可を求める願いを表わす。

Дайте отдохну сначала!; Давайте буду читать!

- ▶ 命令法の形態はそれ自体で最も一般的な形式の要求を表わすが、音調、語彙的手段、文法的手段(例えばアスペクト)によってさらに modal な感情表現的なニュアンスを加えることができる。

- ▶ 語彙的手段によって интимность, фамильярность などを表わす。

Дай-ка мне книгу! (本を貸してくれないか) cf. Gib mir mal das Buch!

- ▶ -ка は命令形ないし命令の意味を表わす語について、命令を柔らげ、打ち解けた調子の依頼・忠告を表わす。

Дай же мне книгу! (さあ本を貸せよ) cf. Gib mir schon das Buch!

- ▶ アスペクトの主観的選択によって意志の表現に強弱のニュアンスが生じる。不完了体の命令形は、ふつう、完了体の命令形よりもさらに強い衝動を表わす：Сядь, Илья! Ради бога, сядь! Ну, да садись же! (Чех.); Выверните карманы! Ну, живо! Что я вам говорю? Выворачивайте! (Н. Остр.) 動作が速やかに遂行されなければならないことがコンテキストから明らかな場合、不完了体の命令形の衝動性の表現力が最も明瞭に現われる：Полно врать, - прервал я строго, - подавай сюда деньги, или я тебя взашей прогоню (Пушк.)。他方においては、逆に完了体の命令形が不完了体の命令形よりもいっそう強い衝動を表わす場合がある：Придите в четыре часа:: Приходите в четыре часа; Садитесь... Но Симон продолжал стоять и заслонял Бочкову. - Картинкин, сядьте. - Но Картинкин все стоял. - Картинкин, сядьте. Но Картинкин все стоял

и сел только тогда, когда подбежавший пристав ... трагическим шепотом проговорил: - Сидеть, сидеть! (Л. Толст.) (この場合、衝動が強まってゆく)

[АН СССР Рус. грам. 1. §1481; Academia Praha Рус. грам. 1. §254]

否定の命令の場合は不完了体の命令形の使用が優勢になる。完了体の命令形の否定用法は限られていて、не покинь(те), не оставь(те), не забудь(те)などの固定した切願の表現や, не тронь(те); Смотри, не упали в рекуのような警告の表現にのみ見られる。

- ▶ 命令形の前に人称代名詞が立つと、絶対的な命令、定言的命令になる。

Ты молчи!; Послушай, будь друг, ты мне помоги!

- ▶ 命令形のあとに人称名詞が来ると、より柔らかな要求になり、懇願の意味が強まる。

Дай ты мне эту книгу!; Уведи ты меня куда-нибудь.

<註>これらの場合、本質的な役割を演じているのは音調である。ここにおける人称代名詞は主語というよりも呼びかけの機能をもっている。

- ▶ 複数の対話相手に呼びかける場合に、単数の命令形を用いることができる。

Граждане, разойдись!; Смотри, ребята!

- ▶ 口語において完了体の命令形は“逆の衝動”として動作の禁止を表わすことがある。

Поговори мне еще! (т.е. 'замолчи'); Застрелю! Коснись этой женщины!

- ▶ 命令法の形態の転位的用法 ◀

1 2人称単数の命令形が直説法的機能をもつ場合。

a) 接続詞のない条件文、譲歩文において

Узнай я об этом, я тебе сейчас скажу.

Хоть кричи, никто тебя не услышит.

b) 必要性、不可避性、義務、責任(せざるを得ない動作)を表わす。

Ему трудно: он и работай, он и учись.

У нее нет ни дома, ни родных. Хочешь не хочешь, а иди и слушай разговоры (Чех.)

Всякий сверчок знай свой шесток (Пословица) (т.е. 'должен знать')

Кому кадят, тот и кланяйся (Пословица)

Любишь кататься, люби и саночки возить (Пословица)

動作の行い手がその意志に反して強いられる動作を表わす。

Все говорят, а мы молчи.

На улице праздник, у всякого в доме праздник, а ты сиди в четырех стенках!

c) 動作の実現の不可能性・困難性、動作の無益性を表わす。

Ему и слова никто не скажи; Жди от него помощи, как же!

e) <imperativus dramaticus> 過去の不意の望まざる動作を表わす。

Его ждут, а он и опоздай на целый час.



2 2人称単数の命令形が接続法的機能をもつ場合。

a) 接続詞のない仮定文において、人称代名詞主語は後置される。

Приди они пораньше, я помог бы им.

Не опоздай мы, мы бы его застали.

Но никто не знал о тайной беде моей, и, скажи я о ней, никто бы мне не поверил (Пастернак)

b) 助詞の бы と結合して願望を表わす。

Будь бы тишина!

## V 接続法 (сослагательное наклонение, modus conjunctivus)

1 接続法の形態: <=1=> + бы играл бы, играла бы, играли бы

ギリシャ語, ラテン語, フランス語, イタリア語, ドイツ語などの接続法が屈折形態による modus であるのに対して, ロシア語の接続法は時制の系列の中に現われない。

	Lat.	Ital.	Fr.	Germ.	Russ.
直説法	laud-ō	poss-o	peux	singe	делал
接続法	laud-em	poss-a	puisse	sänge	делал бы

	er komme	он пришел бы
	er käme	
	er sei gekommen	
	er wäre gekommen	
	er werde kommen	
	er werde gekommen sein	
	er würde kommen	
	er würde gekommen sein	

▶ 接続法の paradigmatic form としての (я) написал бы... は modal な統辞的結合としての <命令形 + бы> (приди бы), <不定形 + бы> (узнать бы), <分詞 + бы> (узнавший бы) などから区別されなければならない。

2 接続法の形態の意味と用法

接続法の形態の虚構性の意味は, 動作を可能性のあるもの, 仮想的なものとして表現する用法に現われる。

Мне хочется играть... Я сыграла бы теперь что-нибудь (Чех.)

▶ 接続法の動詞形態の虚構性・仮想性という一般的・抽象的意味 (構造的意味) はさまざまな統辞的条件とコンテキストによって具体化され, 願望・希求・命令・可能性・仮定条件などの意味を表わす。

a) 希求法 (optativus) 的用法。願望 (望まれる動作) を表わす。助詞や間投詞の使用によって願望の意味が強められることがある。

Пришла бы она скорее! / О, пришла бы она скорее!

Одолжил бы ты мне лыжи на завтра! / Эх, одолжил бы ты мне...

Хоть бы травка, хоть бы листок на дереве шелохнулся!

Если бы сын учился! / Учился бы сын!

Как бы я не промахнулся! / Не промахнулся бы я!  
Только чтоб все хорошо кончилось! / Кончилось бы все хорошо!

- ▶ 願望のニュアンスを強める助詞, пусть бы, только бы, лишь бы, что если бы, лучше бы, скорей бы, хорошо бы чтобы, вот бы хорошо бы, как бы только не...

- b) 接続法は陳述の断定性を目立たないものにして, 命令法の代用となり, 対話相手に圧迫感を与えない, 間接的な命令・提言を表わす。力点のない助詞 чтоб がしばしば用いられる。

Чтоб ты больше не приходил!  
Чтоб он сюда товарищей не приводил!  
Ты бы прилег и отдохнул (бы).  
Сидел бы ты дома!

- c) 仮定法 (条件法) 的表現。接続詞のある場合とない場合とがある。

Через час вы бы меня здесь уже не застали. / Если б вы пришли на час позже, (то)...  
Знал бы он, сказал бы тебе. / Знал бы он, так бы тебе сказал. /  
Он сказал бы тебе, если бы он знал.

### 3 従属節における接続法

接続法は直説法 (あるいは命令法) の中に組み込まれて, 複文的統辞構造の構成部分 (従属節) に現われる。

- a) 願望・欲求・義務などの意味機能をもつ。

Научите, чтобы я понял.  
Мы требуем, чтобы вы выполнили план полностью.  
Необходимо, чтобы договоры вступили в силу.  
Надо писать так, чтобы каждый понял.

- b) 間接話法における <optativus>

Мать сказала, чтобы дети пошли за доктором.  
←Мать сказала: "Дети, пойдите за доктором!"  
cf. Мать сказала, что дети пошли за доктором.  
←Мать сказала: "Дети пошли за доктором."

- c) 話者が伝達する内容について不安や疑惑をもっている場合, 従属節に接続法を用い, 望まざる動作に対して否定詞 не を付す。

Мы боимся, чтобы (/как бы) Борис не уехал.  
(Wir fürchten, daß Boris abreist; We are afraid that Boris may leave)

cf. Мы боимся, что Борис не уедет.  
(Wir fürchten, daß Boris nicht abreist; We are afraid that Boris will not go away.)

Сомневаюсь, чтобы он смутился.

- d) 主節に否定がある場合。

Не может быть, чтобы она не сознавала этой опасности.

Никогда еще не было, чтобы в этом привычном мире случались такие непонятные вещи.

С тех пор не прошло ни одного дня, чтоб я не думал о мщении.

Не было ни одного в классе, который бы не выполнил задание.

Нет такого расписания движения, которое бы не изменялось.

Я не знаю ни одного актера, который тяготился бы порученной ему ролью в горьковских пьесах.

е) 固定した表現構文。

Сегодня слишком холодно, чтобы можно было идти гулять.

Достаточно было любого случая, чтобы она вспоминала о нем вновь и вновь.

Этой короткой нерешительности было достаточно, чтобы волк выполз из круга за линию стрелков.

cf. Десяти минут ему было достаочно, чтобы не только продумать план операции, но и отдать нужные приказания.

На то и щука в море, чтобы карась не дремал.

cf. Художник на то и художник, чтобы уметь поставить в себя вместо своего <я> - чужое.